

2. ウクライナ避難者による

パネルディスカッション

発題①

ユリヤ・ベルナツカ Yuliia Bernatska

最初に、日本、そして日本の皆さんの私たちへの支援、思いやり、そして保護に、感謝を申し上げます。私たちへの心遣い、そして今までもそして現在もずっと理解を示し、受け入れ続けてくださっていることに、感謝します。ウクライナとウクライナ人に対する皆さんの支援は非常に素晴らしいもので、本当にありがたく思っています。私からはまず、最初の数ヶ月で私たちが感じたこと、そしてどのような支援が、もっともインパクトがあり効果的だったかについて、話します。ウクライナ人の多くは、書類以外、何も持たずに日本にやって来ました。私自身もそうでした。その時期は、自衛本能が働き、「とにかく安全な場所を見つける」ことが第一の目的でした。私たちにとっては日本がその「安全な場所」でした。日本は、保護、安心、安全、そして住居や衣服、医療サポートなど、その時々に必要なものを与えてくれました。VISAの速やかな発給や日本財団による支援、特に東京都では快適な住環境に加えて、YMCAの家庭訪問、細やかな聴き取りや時間の経過に対応した支援のおかげで、生活のための必要な資源や情報を得ることができました。私たちはこの1年間、心身を回復し、新しい環境に適応し、異なる文化や生活様式を理解するために費やしました。これは適応のための時間でした。振り返ってみると、ウクライナ避難民という、強制的に移住せざるを得ない状況に置かれた人びとにとって、最初の援助が重要であることが言えます。

特に、心理的、医療的な支援です。何気ないコミュニケーションからその人の状態を判断し、必要によっては、適切な専門家や医療機関につなぐ

こと、そして通訳を介して医師との意思疎通を図れることが重要です。

次に、語学学習です。生活を送るための最小限の講座も必要ですが、重要なのは専門的な語学学校です。私が多くのウクライナ避難者から得た情報では、日本語を一早く話せるようになったのは講師のもとで1日4時間以上日本語を勉強した人たちです。

都営住宅や市営住宅に入る前のホテル、そして住宅環境は私たちにとって最も心強い支援で、何よりも安らぎと安心感、生活の基盤を与えてくれました。ウクライナ語に翻訳された、日本での生活ルールや災害時の情報は非常に役に立ちました。

日本での人脈作りや新しい友達づくり、日本人との交流活動も重要です。ウクライナ人は新しいことを学んだり、旅行したり、博物館、美術展や劇場を訪れたりすることが大好きです。これらによって日本の文化をよりよく理解することができます。

また、うつ状態にならないようにするには、当初のショックを乗り越えることが大切になります。一年前に来日した時、私たちは数カ月でウクライナに帰国できると信じていました。しかし、残念ながらウクライナの状況は、深刻に、危険になるばかりです。多くの避難者は帰る場所がありません。家もない、仕事もない、親戚もウクライナに残っていない。

怖いことです。

でも、私たちは生き続けなければならないし、子どもたちを育てなければならない。そして何より、私たちは「ゼロから生活を築き始めている」のです。

ですので、本日、このようにウクライナ避難民自身が、タスクや優先順位、ニーズをどう捉えているか、その大きな変化をお話できる機会は非常に重要なのです。

1年前は自分たちの命と子どもを守ることが最優先のタスクでしたが、今日は自分たちの生活をゼロ

から構築するというタスクに直面しています。ロシアによる侵攻前、ウクライナ人は比較的裕福で、多くの家庭がフラットや田舎に家を持ち、車も1台以上あり、よく旅行もしていました。ウクライナ人のほぼ7割が大卒で、若い世代を中心に英語を話す人も、国際的なプロジェクトに積極的に参加しています。

何より私たちは一人一人、職業経験（キャリア）を持っています。私たち、この職業経験（キャリア）をぜひ日本社会でも生かすことを望んでいます。私たちは日本社会から援助・支援を受けていますが、今、そしてこれからは私たちが「お返しをする時」だと捉えています。

私たちの経験や知識を皆さんに提供し、日本社会の発展に役立てたいのです。

後程、もう少し詳しくお話をさせていただきます。

次に話すイリーナは、弁護士です。彼女は今、私たちウクライナ避難民に発生する生活の課題・法律問題について多くの仕事をしています。イリーナさんお願いします。

発題②

ウリバチョバ・イリーナ Iryna Hrybachova

キャストグローバル法律事務所で働く私たちは、法的支援を求めてやってくる多くのウクライナ人避難民とコミュニケーションをとっています。ウクライナ人にとって最も関心の高い法律問題は何だと思われますか。まず、ビザや移住の問題です。日本に避難してきたウクライナ人は全員、1年間の延長可能な在留資格（特定活動ビザ）と、就労ができる資格を得ました。この1年間、ほとんどのウクライナ人は新しい生活環境に適応し、日本語と日本文化を学び、雇用の機会を探して来ました。

しかし、あっという間に1年が過ぎ、再び在留資格の問題が浮上しました。ビザは1年単位での発給のため、長い期間の生活設計を立てることが難しいのが現実です。多くのウクライナ人は、日本でのさらなる滞在の見通しが立たないため、1年間の滞在後、いまよりも更に危険な状況であったとしても、「ウクライナに戻りたい」と考えるようになっていきます。

ウクライナ避難民が日本各地で充実した生活を送り、日本社会に溶け込むためには、毎年在留資格を確認するのではなく、長期または永住の機会を持つことが非常に重要になってきます。

そして、ウクライナ人にとって関心事は、ウクライナでの資格やこれまでに得た経験・技能に応じた雇用の機会です。

意外に思われるかも知れませんが、多くのウクライナ避難民が、日本で起業し、ビジネスを展開することに興味を持っています。しかし、日本語能力はもちろん、日本と現地の法律の知識がなければ、それはほとんど不可能です。ウクライナ避難民には、外国語の知識、生活の様々な分野での特別な知識や技能、迅速な学習と適応能力、日本社会の役に立ちたい、ウクライナ社会の役に立ちたいという気持ち、そして大きな労働力としての可能性を持っているのです。

日本でのビジネスの形態、許認可・登録手続き、税制、不動産取得などをクリアし、ウクライナで自分のキャリアから、何らかの経験やコネクションを持っている人もおり、それを活用したいと考えています。

また、避難しているウクライナ人の多くは同じウクライナ避難民のために、ボランティア活動をしており、ヨーロッパ諸国に避難している他のウクライナ人とつながりがあり、共同でアイデアやプロジェクトを実行することが可能です。

このように、自己実現、雇用、ビジネス、共同プロジェクトなどの機会が、ウクライナ人が日本社

会の一員として一人前になることを後押ししていく大きな鍵になるのではないかと考えます。

発題③

ユリヤ・ベルナツカ

ウクライナ人が日本社会に溶け込み、双方にとって最大限の効果が得られるようにすることは、私たちがクリアすべき課題はなんでしょうか。

社会の完全な一員となり、役に立つことが、今の私たちにはとても重要です。

私たちは今、職業人としての可能性を開花し、生活を立て直したいと思っています。無償の住居や経済的な支援はまもなく、あるいはいずれ終了しますし、それは当然です。私たちはすでに、日本でどのように生活やキャリアを築いていくかについて考える必要があります。

そのためには、いくつかの方法が考えられます。ウクライナの卒業証書や資格証明書の認可について。たとえば、日本で美容師になるには専門学校で2年間勉強しなければなりません。避難民のなかには10年以上、上級の美容師として経験と実績を持って日本に来ている方もいます。彼女たちは勉強するまでもなく、すでにハイクラス・マスターで、もし、資格認定や卒業証書確認制度が導入されれば彼女たちは職業として、好きな仕事をし、経済的に支え、税金を納めることができるようになるでしょう。現状では、彼女たちはボランティアか不法就労、得意でない仕事に就くことを余儀なくされ、多くは工場で働いています。医師の避難民も多くいますが、もちろん一律的に資格の認可を求めている話ではなく、職種ごとにより柔軟な制度に変更できないかという問題提起です。

次に再教育について。異なる文化、言語の環境で働くための、再教育はもちろん必要です。大学とは違い、再教育コースは市場のニーズに素早く対応し、適切な人材を育成することができます。こ

れはウクライナ人だけでなく、日本人も同じです。たとえば、このようなことです。日本は高品質な機器を製造する国として世界中に知られています。ウクライナは、最強のソフトウェア開発者がいる国として世界中に知られています。ITはウクライナの名刺代わりなのです。ソフトウェア開発については、私たちの経験を共有することで日本の発展を手助けすることができます。私は20年以上ITに携わり、ウクライナで自分のIT会社を持ち、マイクロソフトのシルバーパートナーでもあります。

ウクライナ避難民の現在の置かれた環境を見た時に、日本の企業に、ウクライナのIT専門家による人材強化の機会を提供したいと強く思うようになりました。実際、3月からは、日本に避難しているウクライナ人を対象に、新しいIT専門分野であるPower BI データアナリストのトレーニングを開始する予定です。卒業後は、企業内で自動分析レポートを作成することができるようになります。このようなスペシャリストは日本でまだまだ数が少なく、市場でも需要があります。現在、このコースには10人の募集に対して、応募が109件あります。学生を厳選しており、受け入れを決定する前にオリエンテーション・トレーニング、そしてテストとファイナンシャル・インタビューがあります。学生の多くは金融のプロ、マーケティングのプロ、アナリストで、英語と日本語のスキルがあります。研修後は、日本企業や国際的な企業で活躍できると信じています。この研修は、ウクライナの女性を支援する私の取り組みの一環です。私は教育や就労の分野で、自分のキャリアを生かしてウクライナ避難者を支援し、協力できることをうれしく思います。

次に、日本語の集中的な学習がいかに重要で効果的であるかは、最初に述べたとおりです。たとえばカナダには多くの語学学校があり、移住する外国人は誰でも無料で利用できます。自分の語学レベルを調べるテストを受け、ゼロから上級まで

のクラスに分けられます。このような語学プログラムは、カナダ政府がスポンサーとなっています。

東京でも、現在、語学学校と就業トレーニングを組み合わせた支援コースができましたが、これは非常に良いことだと思います。

発題④

ウリバチョバ・イリーナ

教育の話題が出ましたので視点を少し子どもに移します。

ほとんどのウクライナ人は様々な年齢の子どもを連れて来日しました。その後、子どもたちは、それぞれの地域の保育園や小中学校に入学し、ウクライナ人の子どもたちが幼稚園や学校に入園する際には日本の法律に従って経済的援助が行われました。子どもたちが環境に順応し、新しい友人を見つけ慣れない言語を習得するのは非常に難しく10代の子どもたちの中には心理的な助けを必要とする子もいます。

ご存知の通り、日本の学校に通った後子どもたちは夕方から夜にかけてオンラインでウクライナの学校に出席しています。そのため、ウクライナの子どもたちがウクライナ語と日本語の両方で自由に出会い、コミュニケーションできるような余暇活動を目的としたプロジェクトを企画・支援することが非常に重要になります。YMCAが日本で暮らすウクライナ人の子どもたちのための日曜学校と協働したり、日本人の子どもも含めて交流の機会を積極的に企画したり、日本語・ウクライナ語での絵本作成や、図書館を運営していることは大切な働きです。

日本に滞在中に中学や高校を卒業する10代の子どもたちの高等教育機関への進学は問題です。日本語も英語も十分に話せない子どもたちは大学に進学できず、親は教育費を負担できません。この問題については、大学と協力し、優遇条件での入学

準備コースの編成など、最適な解決策を見出していく必要があります。

また、ウクライナから日本の大学に留学している学生も多く、様々な交換留学制度や研究制度があります。日本語を勉強している人も多いのでかなり高いレベルの日本語を話せます。また、彼らは日本の大学で関連する資格を取得するために勉強しているので、非常に貴重な専門家でもあります。

このようなウクライナ人学生や若手研究者を招聘する大学のプログラムは、日本の企業にとっても学生にとっても非常に有望です。したがって、このようなウクライナ人学生・研究者の招聘プログラムを増やすことは非常に重要かつ意義深いことです。

最後に：ユリヤ・ベルナツカ

本日はこのような提案をさせていただく機会をいただき、ありがとうございました。私たち自身も、日本社会について学んでいるところです。外国人、そして女性が働くことや、教育システムについて、日本の課題もあると聞いています。もちろんウクライナにも当然あります。中長期的な支援について考えるヒントとなればという思いです。

チャレンジングな機会を与えてくださり、ありがとうございました。

司会者：横山由利亜

ユリヤさん、イリーナさん、ありがとうございました。

戦争、避難が長期化する中で、日本語の壁や文化の違いを越えて、支援を受けるだけでなく、一時的なアルバイトではなく、時間をかけてでもキャリアを生かして日本に貢献するということが「ゼロからの人生のやり直し」の目標、希望に

なるというお二人と話を重ねて今回の
presentationの運びとなりました。

では、ご出席のウクライナの皆様からコメント
を頂きたいと思います。

コメント①

オレナ・シェフチェンコ Orena Shevchenko

私は14歳の息子、ナザルと一緒に日本に来ました。

息子は私と一緒に2か月前から日本語の勉強をしながら、日本語学校のほかにオンラインでウクライナの学校の勉強もしています。

日本語の習得について、日本語がわからない状態ではもちろん日本での生活が成り立たないこと、それから息子の学業についてもこの先の進学などにとって非常に重要であることは、よくわかっています。

ですから「頑張らなくては」と思うんですけれども、現在の子どもの生活はかなり厳しいです。

日本の学校を終えて帰宅し、日本語の勉強をし、さらにオンラインレッスンでウクライナの学校の授業をする生活はかなり負荷が大きいです。

ウクライナの学校も、8年生（日本の中学校に相当）まで無事に終えなくてはならないのでそれを投げ出すわけにいかないし、日本語の習得もそうだということになるんですけれども、非常にいろいろな課題に対して日本語クラスのスピードがちょっと速すぎるため負荷がより大きくなっています。

あれもこれもと要求されるものですから、子ども、14歳という難しい年齢でもありますし、今では「どっちも嫌だ」となっています。

「ウクライナの学校も嫌だし、日本語の勉強も嫌だ、もううんざりだ！」ということになってしまっています。

親としても、これらは本当に必要だと思うんですが、速度が速すぎるのではないかとも思います。

一体、どこに向かって急いでるんですか、と思わざるを得ません。

「このページをやりましょう」と言われて本をめくるとすぐに「はい次のページ」と進みます。

新しく紹介されたことを身につける時間がないまま、どんどん、どんどん進んでしまいます。

私自身も、大人として、仕事やボランティアと合わせて子育てをしていますが、それらの合間に子どもの宿題を見てやらなくてはいけないものですから、とてもじゃないけど全てをみてやることができません。

夜になっても終わらない宿題に、私も息子も本当に嫌になってしまうということがあります。

どうやって息子を助けてあげたらいいのか、本当に悩んでいるところです。

私自身にとっても希望を持てる道、というと大袈裟ですけど、時間をかけて、例えば半年ぐらいかけてゆっくりと大人も子どもも、ゆっくりと日本語が身につくような形で学べるような場を提供してえると嬉しい、というのが正直なところです。

何でこんなに急がされているのか、この状況からどうやって抜け出たらいいのかかわからずに本当に困っている、という気持ちです。

もうひとつ、問題があると感じているのはスポーツをする時間ないことです。

本当は息子には空手とか、やってみたいこともあるんですけれども、それをする時間がありません。

普段できることといったら、ものすごくたくさん日本語学校とウクライナの学校の授業と課題が全部終わってから、夜10時を過ぎてから、息子と一緒にちょっと家の周りを散歩することぐらいです。

そんな生活ですから、運動だけじゃなく、友だちを作る時間ありません。

休日ですら、できることといったらウクライナの友だちがSNSに載せている様子をみたり、メッセージで連絡を取り合うこと、たまに近所に住む私の妹、彼にとってはおばさんですが、そこへ行くぐらいしかないんです。

どうやってこの子を育てていけば良いのか、本当に私は困っています。
今の私にとって、それが一番の問題です。

司会者：もちろん、このように積極的に提案やアクションができる状態にないウクライナ避難民の方がもちろん大勢おられることについてもお二人は認識され、ユリヤさんは冒頭、心身の医療対応の重要性について話されました。おひとかた、心理カウンセラーで日本で避難生活を送りながら、ウクライナ本国、日本の避難者のメンタルカウンセリングを行う、ナタリア・ネステレンコさんより、メンタルをめぐる避難者の状況についてコメントを御準備いただいています。ナタリア、よろしくお願いします。

コメント②

ナタリア・ネステレンコ Natalya Nesterenko

ハリコフから娘と一緒に来日したナタリアと申します。

もともと心理カウンセラーをしており、現在、ウクライナの人々、特にここにいるような避難してきている皆さんが現状に適應できるよう、いろいろな心理的サポートをしています。

先ほど、ユリヤさんがお話をくださった通り、私たちウクライナ人というのは本当にクリエイティブで働き者です。

自分たちのためだけではなく、日本の社会のために貢献できることがたくさんあると思っています。

ただ、やはり戦争によって負った傷というのは非常に大きいものがありますので、やはり最初のうちはそれを乗り越えるため、置かれた状況に慣れていって、本来持っているクリエイティビティ

とか、自らが持てる能力を発揮できるような状態にまで持っていけるようにサポートしてあげることが重要になります。

ですから、日本政府とか地方行政、YMCAのようなNPOを含む諸団体の方がやってくださっているさまざまなサポートは非常に大きな意味があると思います。

それは、足下が崩れ落ちてしまったような人たちが大地を取り戻す、足元をしっかりと取り戻すという助けをしてくれている、ということなのです。

特にYMCAの由利亜さんたちがやってくださっている、家庭を訪問して避難者の声を聞くということは本当に心理カウンセラーと同じような大きな役割として役立っていると思います。

心理カウンセリングというのは科学に立脚して、心に傷を負った人たちを回復させるプロセスそのものですから、そのような役割を担っていただいていると思います。

ウクライナから避難してきた人の大半が、やはり心に傷を受けています。

もちろん、人によってその傷の深さには違いがあって、それぞれ影響の出かたや度合いなどが違っていて、さらにそこからうけるストレスの受け方にも違いがあるのです。

それが非常に大きい人もいますが、だからと言って全然そこから立ち直れないわけではありません。

例えば親戚の人であったり、こういう団体であったり、心理カウンセラーなどが知識に基づいて必要なサポートを提供すれば、必ず立ち上がっていける、立ち直っていけるものです。

今、75%ぐらいの避難者がさっき言ったような傷を負って日本に来たけれど、やはり不安な状態にいるという人々ですけれども、そういった人たちがこのような心理カウンセラーとかサポートを受けることで回復が非常に早くなるんです。

その結果、幸いなことに、私に相談してきている方々の大部分が徐々に回復してきています。

実現したいことが見えるようになってきたり、いまお話があったように、例えば語学を楽しんで学んでいたりと、具体的な形で出はじめています。

ですから、この心理的サポートというのは非常に重要で、身体的健康を含め全ての回復を早めることができます。

そのように、個別にようやく自分が少し本来の状態に戻っていく過程に入るとき、今度は共通の問題が生じてきます。

共通の問題とは何かというと、この先の不安です。

未来が不安定なままにあるということが一番の問題となるのです。

「この先の人生どうなるんだろう。」「新しい文化、新しい生活に適應できるだろうか。」「子どもの教育はどうしたらいいんだろう。」

このようなさまざまなレベルの多様な不安に対してどう対処したらいいのかわからない、その不安定さが共通の問題として立ち上がってきます。

ユリヤさんが先ほど具体的な例を少しお話してくれましたが、この不安に対処するための基本となる方向性は同じだと思います。

人々が立ち直って、回復してきた時に、新しい現実を受け入れ、それに適應して、そこに新しい意味を見出していける、ということが必要なのです。

このような状況で何ができるのか、何をやればいいのかというと、自分が元の自分に戻れるよう、自分の現状をコントロールできる、感情をコントロールするバランスを取り戻す、ということを手助けあげることがとても重要になってきます。

それからトラウマを受けた人、傷を負ってきた人の話の他にも、もうひとつ対処が必要なことがあります。

みなさん知り合いや親戚を頼って日本に来ている中で、お互いの人間関係や新しい異文化との遭遇という部分で、表立っての傷としては出てこないけれど、その中に矛盾や葛藤があって、それでかなりまいってしまっている人々もいます。

そんな人に対しても、その矛盾をどう乗り越えるか、お互いをどう理解し合うか、バランスをどうやって取っていくか、というサポートもやっています。

今日のこのイベントを開催していただいたYMCAの由利亜さんに心から感謝しています。

こういった場で個人ではなくみんなで、グループで、共通に抱えている問題を話し合える場を持つことができたことが非常に大きな助けになっているからです。

ただ、全体の25%ぐらいの人は深刻なトラウマを経験していて、PTSDの症例になる程の状態です。

こういった人は年齢にもよりますが、なかなか回復が難しい深刻な状態にあります。

心に常にネガティブなものを持っていて、いつも恐怖感にさらされ、パニックになり、攻撃的な行動をとってしまう場合すらあります。

彼らの回復には時間がかかりますし、もっと集中したケアというか関わりが必要になります。

ここでも由利亜さんに感謝したいのは由利亜さんがこういった方々のお宅を訪問してくださっていることです。

これは非常に重要なことで、こういった人は得てして引きこもってしまい、誰とも接触しないまま、次第に連絡が取れなくなるような状態になります。

そうなる前に由利亜さんが訪問し、他のボランティアや彼らに必要なサポートに繋いでくださっています。

例えば、心理的サポートやお薬などのメディカルサポートにどうしたら繋がるのかを手助けしてくれ

ているお陰様で、最初のグループの中には回復してきている人たちもいます。

これは本当にそういったみなさんの御尽力のおかげだと思います。

私たちウクライナ人を助けてくださり、そして私たちがお互いに助け合うことを助けてくださり、本当に感謝しています。

まだ回復途中の人もたくさんいますけれど、ただ与えて、ただ受け取るという関係ではなく、クリエイティブに協力しながら先に進んでいくことができるといいと思っています。

ありがとうございました。

第2部「私たち日本社会が問われていること」 (パネルディスカッション)

<登壇者>

横山由利亜

公益財団法人日本YMCA同盟

ウクライナ避難者支援プロジェクト責任者

村田陽次

東京都生活文化スポーツ局都

民生活部地域活動推進課課長代理)

小野一馬

NPO法人ビューティフル・ワールド理事

大分県府にて避難民受入れ

櫻井佑樹

AAR Japan 認定NPO法人難民を助ける会

プログラムコーディネーター

横山) 第2部「私たち日本社会が問われていること」というテーマでお送りします。第1部では、日本側からこの1年の報告をし、そしてお二人の、本当にスーパーウーマンであり、ウクライナでも著名なリーダーシップのある方々、そしてフロアーからも生のご発言をいただきました。

この第2部では、私たち日本社会、といえ大上段ですが、今日は3名の皆様にご登壇いただいて、私を含め4名、実際に行政やNPOの第一線でウクライナ避難者支援にかかわって、担っておられる方々にご登壇をいただいて進めてまいります。

では、最初にお一人ずつ自己紹介、そしてウクライナに結びつけて、今活動されておられることなどをお願いいたします。では、小野さんからお願いします。

小野) NPO法人ビューティフル・ワールドの小野と申します。私の妻がウクライナ、ハルキウの出身で18年ぐらい付き合っていて、結婚してから18年、ウクライナといろいろなやりとりをしています。そういった関係で、私たちは長崎県に住んでいて、戦争が始まった時にも長崎県に住んでいまし

たので、北部九州、福岡県、大分県、長崎県、こちら辺に避難民の方をお迎えして、今総勢で35名の受け入れをしています。主に大分県で、別府市に25名、11世帯ですね。ここの皆さんのお世話を、私たちは受け入れた方々を新たな親戚、新たな友人、親友として受け入れています。

支援者とかそういう垣根などはなしに、本当に友人として受け入れましたので、毎日お茶を飲みに行き長話をしているというところです。

ウクライナ避難民支援もそうだけれども、ウクライナ本国への支援としても、発電機を送ったり、車椅子を送ったり、そういう活動をしています。復興支援、そういうのも戦後の、勝利後のウクライナに必要なってくる。

私たち夫婦は、生涯をこのウクライナに捧げるつもりで今覚悟をしています。美しいウクライナに戻るまで、私たちはウクライナ支援を続けていこうと思います。よろしくお願いします。

横山) 櫻井さんお願いいたします。

櫻井) 難民を助ける会の櫻井と申します。お呼びいただきありがとうございます。

私たちの団体は国際協力団体で、現在私は国内外のウクライナ支援の担当で、モルドバとウクライナ国内、あと日本で活動しております。

モルドバには事務所があり、ウクライナの難民の支援をしています。私は主に日本に来たウクライナの皆様の支援を担当しております。

実は本日、このイベントの裏番組で私たちも報告会をやっておりまして、そこでは主に海外支援の報告会をしております。よろしくお願いします。

横山) 村田さんお願いします。

村田) 皆さん、こんにちは。東京都生活文化スポーツ局の村田といいます。

東京都では今、都内に600名弱の方々がウクライナから避難されているのですが、その大体3分の2ぐらいが都営住宅、東京都の住宅に入っています。その600人弱の方々を東京都としても支援していきたいということです。

今私がやっている仕事は、具体的には先程第1部で横山さんからお話がありましたように、日本YMCA同盟と東京都のつながり創生財団という団体と3者で共同して、ポプートニク東京という、避難者の皆さんのいろんな困り事の相談に乗ったり、訪ねてお話をしたり、その困りごとをいろんなところにつなげていく、というような仕事をしております。今日はよろしくお願いします。

横山) ありがとうございます。

今、このセッションはライブで原稿なしでやっていますので、ウクライナの皆さんにはお話しの内容をダイジェストで聞いていただいています。また改めて記録を文字にしたり、動画にしたりして字幕も付けられたらと思っています。

では早速ですけれども、第1部で印象に残ったこと、その中でも今日この場で深めたいことなど、一言だけいただけますか。では、小野さんから。

小野) やはりウクライナで取得されている資格を日本で有効に利用する、といったところも、私たちは今一緒に取り組んでいるところです。プラス、教育ですね。子ども達の教育をこの場で深めたいですね。やはり皆さんご不安だと思うので、そういったところを話したいなと思います。

横山) 櫻井さんお願いします。

櫻井) 私たちも約200名ぐらいのウクライナの方それぞれとお話をしたんですけども、やはり同じような課題を皆さんおっしゃっていましたので、私も在留資格や就業については関心があるところです。

横山) では村田さんお願いします。

村田) 第一部の横山さんのお話にもあったように、1年経っていろんな課題は引き続きそのままに、さらに新しい課題が出てきているということで、これからできるだけ長くないようにと思いつつも、長くなっていくことにも備えなければいけないのかなと思ったりもします。

その中で、さっきユリヤさんの話の中にもありましたが、仕事の話もそうですが、いろいろ活動をしたり、美術館とか博物館、劇場に行ったりとか、少しずつ生活の余裕みたいなものも作っていく、そういうことも含めて、長くなっていくことに備えなければいけないのかなと、ちょっと考えながら第1部を聞いておりました。

横山) ありがとうございます。

では、テーマはかなり多岐にわたりますが、最初に、今日ここにおられる方は東京、千葉、横浜あたりからいらっしゃるのですが、こういった首都圏だけで全体の半数、今1000人前後ですかね、集中しています。

その一方で、私も第1部で触れましたけれども、各都道府県に数名というようなところもおられます。

小野さんから見て都市部と地方部の違いについて気づきがあったら、皆さんもお知りになりたいと思うので、お聞きします。

小野) まず関東は車も要らないし、公共交通機関がしっかりしていますから、関東地区であれば住まいさえあればどこに受け入れても、バスでも地下鉄でも電車でもあります。

地方で受け入れる時、特に我々は九州ですから九州で受け入れる時ですが、例えば福岡県が一番大きくて人口600万人います。九州で一番大きな県で、人口は600万人いますが、福岡市という真ん中

の市を外れたらもう公共交通機関が全くないみたいなのところもあるんですね。

そういうところに避難民を受け入れてしまうと、もう皆さん次の日の買い物から不便で何もできない。ですので、私たちは九州北部で受け入れてくださるところを探した時に、最低限公共交通機関があるとか、これは多分関東の目線では全く出ないと思いますが、バスがあるところ、バスが最低限あるところで探しました。

これに関連して、運転免許の切り替え支援もやっています。ウクライナの免許を日本の免許に切り替えたいという希望者8名のうち、今現状7名が合格していて1名が残っているという状態ですが、これもかなり大変で、私たちは毎週土日を潰して通訳に入り、教習をして、交通法規を守っていただくようにしながら、運転免許の試験を受けていただいたという形です。これも関東では、車を所有するということは、あまりない視点だと思います。

九州について言えば、自然がたくさんあるので、皆さんが戦争で傷ついた心を癒していただく、海が綺麗だとか、山が綺麗だとか、そういうのはいっぱいあります。

ただ、一家に一台どころか一人一台は車がないと生活するのに厳しいようなところがたくさんありますので、そういったところに受け入れてしまうと本当に苦労します。実際に熊本県で駅まで歩いて50分というところに避難民を受け入れたところがありますが、毎日送迎をしているという状態で、大変不満が出ています。

我々は大分県別府市という、大分県でも2番目の町に多数を受け入れ、そこでは最低限の公共交通機関がありますので、自分たちで動けます。

ただ、彼らも車を運転したいということだったので、運転免許を取得し、今4世帯が車の取得をしましたので、今年は一緒に色々とドライブに行けるなど、ワクワクしているところです。地方と関

東の差と言ったら、やっぱりそういう機動力のところですかね。

あとはスーパーの物価とかも違うと思います。例えばウクライナの皆さん、果物が大好きだと思います。やはりリンゴ1個の値段も多分、地方と都市部では違ったりすると思います。そういった生活のところも、地方と関東や都市部とは違うかなと思います。

横山）ありがとうございます。

逆に今の別府の様子を聞かれて、東京の様子はどうか。

村田）はい、東京は全く様子が違っているところでした。

私は東京都で働いていますが、日本の仕組みというのは、日本の国があって、都道府県があって、その下に区市町村という自治体がありますよね。それで、東京都にはさっきも言ったように今600人弱ぐらいの避難者の方々がいっぱいいるんですが、東京都全体で62の自治体があって、そのうち今現在38の自治体に避難者の方々に分かれて住んでいるという状況です。

それだけの自治体に分かれて住んでいるので、なかなか避難者の方々の状況がわからないんですね。かつ、その38ある受け入れ自治体の中には、もともと外国人がたくさん住んでいて、例えば外国語で病院にかかるとか、外国語で相談ができるということもあれば、たまたま都営の住宅はあいていたけれども、外国人支援の体制や仕組みがあまり出来ていなかったようなところもあります。

そうした、東京都内でもいろんな状況がある中に、600人弱の方々が分かれて住んでいるので、その方々の状況がわからない。

先程交通機関がないと受入れにつながらないという話もありましたけど、東京は全部で1,400万人の人口があって、電車も駅もいっぱいあるけど、

人も何もかもが多すぎて、避難者の方々が遠い国から戦争を逃れてきて、顔が見えない中で、一人ひとり散り散りになっちゃうんじゃないかという心配を我々はすごくしました。

その時にちょうど横山さんたちYMCAがウクライナの避難者の皆さんを日本に呼んで入国する支援をされているということを聞きました。そこで我々は、別府の10名の方ほどに寄り添うのはなかなか難しいところもありますが、東京都なりにできるだけ顔が見えなくならないようにということで、先ほどお話ししたようなポプートニクという事業を始めました。

区市町村でも、そういう外国人支援を元からやっていてすでに区役所や市役所の方で避難者に連絡を取っていますというところもあります。そこをやっていてところとやってないところ、できるところとできないところがあるので、そのギャップを何とか埋めようと思って悪戦苦闘しています。

今日来た方々はYMCAに既につながっていると思いますが、まだまだ実は連絡が取れてない人がいます。だから、その方々にできるだけ早いうちに連絡を取っていくというのも、今我々の大きな課題になっています。

横山) まさに別府だと「今日はViraさんがあそこを歩いてたよね」と、誰がどこそこにいるってことがすぐに分かるような近いコミュニティーですし、小野さんもそこに引っ越しされてほぼ親戚、家族そのものという感じで暮らして支援されておられる。自治体との近さも、そんな感じですか。

小野) そうですね、人口は11万人なので、住民の方から昨日あそこで歩いてるのを見たよということが普通にあって、本当に顔が見える支援ができています。これは先程の話じゃないですけど、地方のいいところだと思いますね。悪く言えば監視社会になっちゃうのかもしれないですが・・・悪

いことはできないって言うところではありますけどね。なので、本当にコンパクトにまとまって自治体もサービスが行き届いています。

だから東京都さんみたいに顔が見えない人がいるというのは、大分県とかに入ってくれば、すぐ大分県庁や別府市役所などがぱっと支援しますから、そういうところは地方のいいところだと思うんです。

横山) 私も「免許さえあれば仕事が見つかるのに・・・」という相談を受けるときに、本当に逡巡するんですよ。東京で車に乗ってもし何かあったら・・・ナビも日本語だし、ぶつけて「ごめん」ですまないし、駐車場代も高い。だから私たちは車の運転免許の切り替え支援はやっていないんですけど、でもそのローカリティに合った支援内容メニューっていうのもあるんだなというふうに今思いました。

また、就業のところでもお話しを聞ければと思いますけれども、イリーナさんから在留資格についての問題提起がありました。難民を助ける会、AARさんの場合ですかね、当初からこの国内の避難民の特殊性の指摘をされてきたと思うんですけども、この辺をちょっとお話しいただけますでしょうか。

櫻井) そうですね、難民支援をやっている私たちの姉妹団体、サポート21が難民支援を30年ぐらいやっているんですけども、その中でちょっとした違和感というか、何でだろうと思うことが幾つかありました。

正直に言いますと、ウクライナの方は特別なんですよ。官民そろって、ワーストと支援しようっていう話になっている。

一方で、違う国籍の方が日本にいらした場合は、こういう支援が、ないことはないんですが、官民そろってやるってことはなかったんですよ。ビザも、一番最初の横浜で、すごく早く出るって

というのは本当に不思議だになっていう、詳しい日本の国の政策の方は分からないんですけど、不思議だなと思うことがありました。

でもですよ、ここからが大事なんですけど、せっかくここで人道主義というか、ウクライナの方々を受け入れたという実績があるので、これを機にもっと多くの難民の方々、母国で迫害された人とか、戦争に巻き込まれた人たちを、日本が受け入れていくような素地ができたらいんじゃないかなと私は思っています。すみません、ちょっと法律的なことではないですけどね。

横山) ありがとうございます。

ウクライナの方々も、早く来られた方々は段々そういうこともわかってこられていたり、あるいは先ほどあったように、お嬢さんが日本にいたりするとご家族からそういうこと、本当に全く支援もない中で自分たちがクリミアから来ていかに生活してきて、その苦勞もご存じだったりします。日本のことも、本当に難民の方が少ないとか、もちろん技能実習生の話などもだんだん理解をされてきておられます。

本当に志が厚い方は、自分たち避難者がむしろそういうパイオニアとなって何か施策が変えたり、自分たちも他のより困っている人たちの助けに協力したいというようなこともおっしゃっている方もおられます。なので、今日は逆に私からお願いして、櫻井さんには御発言をお願いしたというところですよ。

いずれにしても、今お話がありましたけれども、今回の緊急的な、国を挙げてのこの初動の部分の連携といいますか、右往左往も含めたそのあたりの動きを、村田さんなどはどのようにご覧になっていますか。

村田) 東京都はさきほどお話ししたように、最初の頃、去年の3月に都営住宅に避難者の方々を受け入れる、住まいを用意するというお話を最初にさせ

ていただきました。そこは日本の役所にしては早かったと思います。

最初の生活の支援、日本に来ていただいて、最初にホテルに入らせていただいて、住宅に移ってもらう、そこまではよかったんです。ただその後、その人達の生活を、皆さんの生活をどういう風に成り立たせていくかということについては、なかなか我々東京都も、また実際に避難者の方々に近いところで支援を行う区役所や市役所も難しい。

何かうまく使える制度がある区市は良かったんですけども、そういうところばかりではない中で、難民を助ける会さん初め、国際NGOやNPO、そういういわゆる行政や役所じゃない民間の団体が早く動いていただいて支えてくれたというところは、我々行政として今でも非常にありがたく思ってますし、それに追いつかなきゃいけないなと思ってます。

実は難民を助ける会さんは、かつてはどちらかというと海外で難民になってる方々を支援していたんですけども、今回最初の頃から、今でもそうですが、ウクライナからの避難者の方々も含めて支援に動かれた経緯とか、考え方みたいな話をちょっと伺えるといいかなと思うんですけど、いかがでしょうか。

櫻井) じゃあ少しお話しします。

今はもうやってないんですけど、私たちは最初の頃、5月ごろから12月ごろまで、18歳以上の難民の背景がある方々に10万円、ウクライナだけではないですよ、17歳以下の方に5万円を一人ずつ給付していました。この人には出す、この人には出さないというのは、本当にお一人お一人と面談して決めました。

これを出した理由なんですけども、特にウクライナの難民の方だったんですが、4月や5月に来た方々が本当に着の身着のままで来て、お金がないと。服もちょうど春から夏に向かうところで着る

ものもない、どうしよう、そういう声を私たちはよく聞いて。そして当時はまだ日本財団さんとかからいつ生活支援金が出るかわからないっていうような状況でした。

それであるならば、その場しのぎ的にはなるんですけども、私たちが少し出していくっていうことを決めて、支給しました。

その後に日本財団さんだけじゃなくて行政の方々、全国各地で一時金出しますって言ってくださった行政の方がたくさん出てきてくださったんですが、私たちはそういう背景で支給をいたしました。

横山) ありがとうございます。

私は東京都と一緒にやらせていただくようになって驚いたのは、東京都が本当に在住外国人支援の底上げといいますか、もともとこのコロナの時にどうやって正しい感染対策やワクチンの情報を伝えるかというようなこともしていて、またオリンピックを挟んで今のウクライナのことがあって・・・何と言いますか、こう通底する非常に強い思いで施策を考えておられます。封筒一つでもどうやったら在住外国人の方々に開けてもらえるか、その辺から見直さないといけないんじゃないかという、生活者の目線から、そして東京という規模なのである分国にインフルエンスを与えるような目線まで、ご一緒させていただいて驚くこと、教わっていることがたくさんあります。

そういった在住外国人支援への思いを少し伺いできれば。まとめとはまた重ならないように、少しお話しいただければ助かります。

村田) せっかく振っていただいたので。

私たち東京都は、もともと在住外国人支援というのはやっていて、さきほど東京に1,400万人ぐらいの人が住んでいるというお話をしましたけれども、実は日本国籍じゃない外国籍の方々だけで、58万人ぐらいの方が東京都内に住んでいるんです

ね。ただ、1,400万人中の58万人、4%ぐらいですかね、実はあんまり意識をしてない人が多かったんです。

ちょっと後でも話そうと思ったんですけども、やっぱりコロナのウイルスが3年ぐらい前に流行り始めた時に、外国人の方が日本人よりも仕事だとか不安定な方が多いので、役所の窓口とか、社会福祉協議会っていう各区市の福祉をやる団体の窓口にたくさん来たんですね。場所によっては、困りごと窓口に並んでいる方の半分ぐらいが外国人だった、というようなところもあったそうです。

そこで、それまでも統計は出ていたんですけども、データ、数字はあったんですけども、東京というのは町中、地域地域に外国人の方がすごくたくさん住んでいるんだということがその時分かったんです。

それから、色んな外国人に対する支援、住んでいる外国人の支援というのをもっと強くしよう、ちゃんとしようっていう動きが強まっていたんですけども、まだそれから2〜3年の時点で、今回の戦争が起こりました。

それでまたコロナとは違う意味で、日本全国でいうと2000人以上、東京だけで現時点で600人弱ぐらいの方々がウクライナから避難してきたという状況で、新しくそれまで住んでいなかった外国人の人達が東京に住み、その方々が色んなことで困っているという状況を、我々役所の人間も含めてそれまでになく強く分かり、課題として、認識をしたということがありました。

ですのでそういう意味では、ちょっと何か閉めみたいな話になりますけども、どういうことが今の日本の社会、我々東京都それから区市町村に欠けているのかということを、皆さんと一緒にこういう場で考えたり、皆さんを時には支援し、時には一緒に活動するというのは、皆さんのため、ウクライナからの避難者の皆さんのためでもありますし、これから先我々日本のため東京のためでもあるんですね。

実はコロナが一旦落ち着いて、また都内の外国人人口というのはどんどん増えてます。これからの日本社会のためでもあると、そういう思いで東京都はこのポプートニクをやっているといういうこともあります。

横山) ご無理を言いました。就業ということに少しフォーカスします。

小野さん、別府の例では、畳屋さんにすぐ決まったというニュースが結構大きく私も見て、さすがだなと思いました。お仕事が決まるまでのさまざまな御苦労であったり、今この1年という中で実際どれぐらいの方が仕事に就かれているのか、勿論言語のこともありますけれども、どういうところがそれ以外の壁になっているか、お話しただけですか。

小野) 畳屋さんはですね、市営住宅に入った瞬間、畳の匂いがするじゃないですか。それで入った瞬間惚れ込んだっていう、これだっ！っていう。ウクライナでは内装業者で、家1軒建てられるぐらいの色々な資格を持っていて、技術も持っている人だったんですが、もう畳にほれ込んで、もうこうやって。もう惚れ込んで畳屋さんに就職したって方が一人男性でいて、この方は正規雇用でいらっしゃいます。

あと、ウクライナの歯医者さんの資格を持っている方が、たまたま家族が歯医者さんに行った時に興味深そうに日本の設備を見てて、院長先生からあの人は何してるのと聞かれて、ウクライナの歯医者さんなんですと言ったら、じゃあうちに来ていいよって言って。

ただ先ほども申し上げましたとおり、ここが問題で、日本の歯科医師免許を取るにはやっぱり学校に行ってちゃんと免許を取らなきゃいけませんから、そこが凄く問題になっていて、彼は技術がちゃんとあるのに資格外のことしかできない。

だから、例えば4年制の大学に行かなきゃいけないところを編入という形で単位を認めてもらうとか、そういったフレキシブルな対応ができれば、非常に助かるなっていうのは凄く思っています。

その他は、別府でホテル観光業が盛んですから、ホテルでアルバイトをしてたりとか、小学生とか中学生とかの子供達がいるお母さん達は基本的にはあんまり長く働くっていうよりはパートタイムで働きたいということですので、職をあまり選ばずに時間で選んで、ホテルでタオルをたたんで裏方をしたりとか、皿洗いしたりとか。

あとウクライナ本国とオンラインで繋がってずっとウクライナの仕事をしてる人もいます。大学の教授とかもいます。この方はヘルソンですけども、ヘルソンの大学でまだオンラインで授業を続けているということです。

基本的には別府で今13名ぐらいの就労が実現していて、関東と違って全然選択肢はない中で、それこそ第1部の時にありましたけれども、私達の方であまり就労を急がなかったんですね。というのも、やっぱりウクライナ人のやりたい仕事をやってほしい。避難民の方のやりたい仕事をやっていかないと、結局双方の為にならないので、そのマッチングに力を尽くした。というところで、やっと半年ぐらいたってやっと就労が進んでいったということですね。

合わなかったら、日本人だったら石の上にも3年とかいうことがあるんですよ、3年我慢してみたいな。でもやっぱり文化的に、嫌だと思ったら結構バンっとモチベーションが下がっちゃうので、もう明日から行かないとか結構あります。それで平謝りでおでこを地面に付けたりすることもよくあるんですけど、僕が謝るだけでそれで済むなら、ということで色々やっています。

文化とかの違い、皆さん経験されたと思うんですけど、スーパーに行っても赤ビーツが売ってないって言ってぶりぶり文句言われて、ボルシチ作れないじゃないかって言われたりとか。スメタナ

とかそういうものないですから、サワークリームとかカッテージチーズとか、チーズ類とかの乳製品はウクライナの家でよく食べられますから、バリエーションがとても少ない。特に地方のスーパーは本当に少ないので、そういうところはやっぱり、食というところは凄くあるなと。

あと医療のところですよ。例えば、日本だったら歯医者さんに行って1本の歯を直すのに半年ぐらい通います。でも、ウクライナだったら1回か2回で治します。その感じが、ウクライナの方にすごい不信感を、別府の方には不信感を抱かせる結果になってしまってます。

日本は歯になじむようになっていうやり方があるけど、東洋医学なんだと思うんですけど、なかなか1発でバンって治すというのは……。内科でもそうですよね。風邪とかでも様子見ましようというのがあるけど、ウクライナだったらちょっと強い薬をはいっと出して、痛み止めとかも結構強い薬を出して、という感じががあるのでそこを説明する為に、別府市さんに医療通訳を雇っていただいて専門で医療を通訳していただく。医療、病院回りは必ずその人に付いて行っていただいて、お医者さんの説明を納得するまで全部通訳してもらって、っていうのをやってもらいました。

これは私、手前みそじゃないですけど、別府市さんに本当に感謝している。本当に日本でも有数の支援だと思えます。

そこら辺は多分皆さん、本当にすごく苦労されてるところだと思うんですけども、本当に日本とウクライナの違い。これは私が妻と18年間付き合ってる中で、ずっと愚痴のように言われ続けてきたことなので、そうなんだろうなと思います。

横山) ありがとうございます。いや、今聞いてそうなんだなと思ったのは、就業にちょっと時間を掛けられたっておっしゃったところ。

私は逆で、凄く働きたい、でも子どもを保育園に預けないと色んな環境を整えたりも難しいと。

それで子どもを保育園に行かせるためには、求職中、ハローワークの登録が必要と。ハローワークに行ってみると、インタビューを受けるけれども、出てくる仕事はなかなか全くイメージと違ったものだ。

ただ、考えてみればそうだと。逆説的と言うか、遡ってこう、自分がすぐキャリアを生かせないとか、日本で子供を保育園に預ける為にはそういった求職活動が必要とか、っていうことの中で、仕組みの中で捉えていかないといけないんだということ、後付けでこう学んでいったみたいなこともあったんですけども。

そういうことの一つ一つの中にも、文化の違い、まさにその考え方とか、確かに辞められた方もおられましたし、色々私もその勤務先にご迷惑をおかけしたこともあったことを思い出しました。

それで、そういうことの反省といいますか、その中で、先程もありましたけれども、避難者の方からやっぱりある程度、集中的に1日4時間、半年は最低集中して勉強しないと、あるいは落ち着いた環境で勉強しないと身に付かないと言うオレナの話がありました。逆に1年経って、お互いにそういうところに一つ帰結した、というところはあるですね。

ある意味日本に中長期的に腰を据えて、就労キャリアを生かしたあるいはその周辺でも仕事をしたいと言った方に、東京として今一つのパッケージを提示をされて、パイロットとして、パイロットと言っていいですかどうか分かりませんが、この3月からスタートします。ちょっとどんなものが御紹介いただいてもいいですか。

村田) はい。今お話があったのは、東京都の産業労働局という部署が用意してるものですけども、職業トレーニングと、それに繋げる間に集中的に、今横山さんがお話しになったような日本語トレーニングを日本語学校と連携してやっていく

というもので。結構中身を見るときついカリキュラムではあるんですけども、凄く時間とやる気のある方は、それに乗せてあげるのがとても就業への近道かなと思います。

先程のミスマッチみたいなお話もありましたけれど、そこのところはウクライナから来た方々、さっきユリヤさんの話の中でもウクライナはそもそもIT大国なんだという話があってこれもだいぶ知られるようにはなったんですけど、まだまだウクライナの方々がどういう専門性を持っていたり、というのはなかなか知られてないところが多いのかもしれない。ですので、それは私たちも引き続き日本の人達に伝えていく必要があるかなと思います。

あと、今産業労働局で集中トレーニングをやっているという話もしたんですけど、その辺一回脱線しちゃうんですが、実は私はウクライナの方に限らず、外国人の方々に東京都内で日本語を学んでもらう時に、色んな学校だったり、学校みたいなものじゃなくて地域のボランティアさんが教えてくれるような教室とか色々ある中で、それがあんまり偏りが無いように、都内のどこでもある程度のボリュームや時間数で日本語が学べるようになっていう方向に何とか持っていきたいなと思って、色んな検討してるんですね。

ただその中で、先程職業に繋がるには集中的なトレーニングが必要な場合もあるという話もありましたし、やっぱり日本人のせっかちさとか、あとは善意、親切でもあると思うんですけど、たくさん勉強してもらいたい、たくさん勉強を用意したいというようなところが強いんですね。

ただ、先ほどお話しいただいたように、ゆっくり学んだり、ある意味余裕を作ることでもあると思うんですが、その人なりのペースで学んで、それでその人なりのペースで学んで余裕ができるってことは、先程ダブルスクールがきついという話もありましたけども、その時間で他のことができる。それは社会に繋がっていく、日本

の地域に繋がっていくということに繋がるものだと思いますので、そういう視点もそうか必要なんだということが、先程のお話から凄く参考になりました。ありがとうございました。

横山) YMCAも日本語学校を運営していますけども、やっぱりメインは進学を目指す日本語学校1年間のコースということで、殆どの日本学校がそこがもう大半の授業になっていて、なかなか生活者の為のとか、あるいは自分が目指す就労の為のってところの日本語を教える学校であったり先生という人はまだまだいないのかなというのは、自分達の組織の学校を考えても、ちょっと考えさせられたりしたところでありました。色んな学び方、日本語ですね、あってもいいかなと思います。

ところで、小野さんはご本業は何で食べておられるんですか、どうやって生活しておられる？

小野) 本業は、格好良く言うと、外資系のITマーケティングマネージャです。格好悪く言うと、インドのソフトウェア開発会社の営業です。なのでそれこそ第1部でお話のあったウクライナIT人材、これっていうのは非常に可能性を私は感じます。

ただ、私、オフショア開発とかやってますけども、結局日本が結構ガラパゴスなんですね、IT業界で。なので、ITエンジニアが全く足りないというのはそうなんです、日本から出て行っちゃってるんですよ、皆さん。何でかって言ったら、給料が少ないから。

日本のエンジニアってなかなか給料も上がらないし、だからそこでウクライナのエンジニアの方々、避難民の方々がエンジニアとして働いてくだされば、そこはすごい力になる。ただ、やっぱりローカライズ、例えばソフトウェアを日本の日本語で納品する時、やっぱりGOOGLE翻訳とかでは難しくて、完璧なネイティブが全部チェックしなきゃいけない。

私はそれで何回も胃潰瘍になってます。インドの会社が変な翻訳をしてきて、私が全部直す、コードを打ち直すっていうところも全部やってるんですけど、日本の企業はシビアなので、IT企業、IT人材、ウクライナのIT人材というところは本当に可能性を感じつつも、非常にそこは困難があるだろうなというのは感じています。

横山） ありがとうございます。

東京と別府ですけれども、ユリヤさんのコースはこれから私たちも後押ししていきたいと思えますし、すでに10名の枠に100名以上の応募があると。

ただユリヤさんもわかっておられて、本気で学ぶ姿勢であったり、今あるベーシックなスキルも含めてかなりシビアには見極めていかなければいけないというお話もありましたけれども、その必要な人材像からですね、ぜひユリヤさんと引き続き色々一緒に考えていただければ、今日ここで生まれたプロジェクトという形でも、うまくなにか進めてやれたらなと思いました。結構あっという間に時間があれてですけれども・・・。

先程櫻井さん、一番困ってる時に現金給付について私も深夜にお電話して助けていただきましたけれども、その時200名ほどの避難者の方に実際にお会いになって色々悩みを聞かれたと。やはり教育に関する悩みが多かったというようにちょっとお伺いしたんですけど、その辺ちょっと御紹介いただけますか。

櫻井） はい、教育についてですね、特にウクライナと日本では学校のシステムが全く違うので、例えば例を挙げますと17歳っていう年頃は日本だと高校2年生なんですよね。だけどウクライナだと、もう高校まで卒業して次は大学へ行きましょうっていう年なんです。日本でいうと18、19歳ぐらいなんですけども、その差があって。

何て言ったらいいんでしょうね、要するに、中途半端になってしまう子たちが問題だなという風にすごく感じました。日本の学校に行くのか、それともウクライナでなくても、ヨーロッパの大学に進学したいのか。やっぱり親御さんも御本人もそういうお悩みを持ってる方がいらっしゃると思います。

そういう子がやっぱりいて、私たちはそういう間（はざま）の子供達にはすごく課題を感じています。

横山） こないだ東京のミーティングでも同じような話がありました。初年度日本に来て、日本の学校に編入する時に1年下げて中学2年生になっている子がかかなりいるんですが、今回中3に進学して、あと1年で高校受験。果たして本当にそれまでに学力、日本語力キャッチアップできるのかという問題と、ご家庭、本人も含めて日本で進学していく、高校からはもちろん主として学費の額も違ってきますし、経済的な負担も大きくなってくる。そういったところをかなりやっぱり見ていかなくちゃいけないんじゃないか、という課題もありましたし。

日本は4月から学校が始まりますけど、ウクライナは5月に終わって次のスタートが9月です。なので、去年もそうだったんですけど、5月まではウクライナの学校を頑張らせたいと言って、4月の波に乗れない。それで気が付くと、もう9月の2学期になっていて、後からだと友だちも出来にくく、腰がひけてしまう。ここをですね、ちょっとこの3月4月、タイムスケジュール的な隙間ですけども、やっぱり色んなところに私たちが知らない、あるいはお互いもっとこう違いに立った上で分かり合えていけば隙間に落ちていけない、あるいはそこでチャンスを逃すことがないようなことができるのかなというのは、本当に最近思うところです。隙間、見えないところ、文化の違いを背景とした

情報の齟齬とかっていうところは、これからますます大事になってくるかなと思いました。

横山) では、ちょっと駆け足ではありましたが、やはりもう何度も繰り返し出てますけれども、ウクライナ避難者の問題はウクライナ避難者だけの問題ではなく、日本で暮らす他の外国人、あるいは日本で受け入れられていない難民の問題であったり、さまざま私たちに投げかけられている問題が多いということ。

そしてそれは何か一つの行政だけ、あるいは民間のNPOだけ、個人だけで解決できる問題ではなくて、これだけパワフルに提案をいただく皆さんなのでネットワーク型で、ウクライナのことを一つの契機と一緒に何かそういったことを変革、変えていける契機に、転換期にできるのではないかなと思っているんですけれども、そのあたり櫻井さんいかがですか。

櫻井) それに関してはですね、やっぱりまずウクライナの方も含め、いわゆる当事者って言われる方々を巻き込んで、どういうことが問題なのかっていうのはきっちり詰めていく、話し合っ、そもそも日本がどういう社会になりたいのかっていう目標を定めた上で、このバックキャストिंग的な思考、バックキャストिंगの思考で今じゃあどうすればいいのかっていうのを考えないと、恐らくバラバラにその場しのぎの政策になってしまうので、一つはいろんな方の当事者の意見をしっかり聞いて政策に反映していくっていうこと。

それと、今回のウクライナの方々を日本が2000人とか受け入れたことを機に、やっぱり難民政策については日本も選択的人道主義ではなくて、真の本当の人道主義大国になるにはどうしたらいいのかっていうのを、難民政策をしっかりと考え、支援政策とか出入国管理法などをしっかり議論して

いくことが大事なんじゃないかなと。ちょっと偉そうですけど、すいません。

それで地域においては、NPOや例えば今主体となってる行政の国際交流協会、さっき一番最初の横山さんのスライドでもありましたけど、国際協力交流協会とか東京都の担当部署だけと、とか、あとNPOとだけでやるのではなくて、結局これ長期的な視点で見たら社会福祉につながる重要なテーマだと思うんですね。

なので地域の国際交流協会とか、あとは社会福祉協議会ってあるんですけども、その人達、その機関とか、あとは日本ですと地域に民生委員さんという、例えば高齢の方とか障害のある方とか、あとは妊婦さんを見守りする役割の方がいらっしゃるんですけども、その人達に例えば外国人の方、ウクライナの方、アフガンの方も見てねって言うと、やっぱりそこでコミュニティでまずは何かできることはやりましょう、それでその上で何か問題があったらYMCAさんとか我々みたいなところにつなげていただければなんとか考えますよ、っていうのはいい理想の姿なのかなって、ちょっと個人的には思ってますけど。

横山) 大事なポイントありがとうございます。では、村田さんからもお願いいたします。

村田) いろいろ教育とか医療とかとか、それぞれ分野ごとに課題があると思うんですけども、基本はお互いのことを知ることと、それを踏まえて必要なことにつないでいくっていうことなのかなと思っています。

さっきあったような、教育で、制度の違いで、ちょっと隙間ができてしまうとかそういうおそれとかも今まであまり意識していなかったところですけども、それを学校の関係者の人達が知ったり、ということはすごく大事です。だからお互いのことを知る、日本の制度も避難者の方々に知ってもらうということが大事です。

それで、YMCAだったり我々だったり、こちらの小野さん、櫻井さんのような方々、私たちも頑張る区市町村も頑張って、いろんな必要なところに繋いでいくということが基本なんですけれども、ただ繋ごうにも繋ぎ先がないっていうのがあるんですよね。例えば、うちは外国人は見ませんという病院ばかりだったら、いくら具合が悪い人を病院に連れて行こうと思っても連れて行く先がないわけです。

だから、我々が今後作っていきたい社会というのは、ウクライナの皆さんだけじゃなくて、日本に住む、東京に住む外国人の人たちが、学校に行く必要がある人は普通に学校に行ける、病院に行きたい人が普通に病院に行けるというような社会を作っていくことが必要かなと。

それで、ちょっと今の櫻井さんの話と重なりますけれども、今回すごく戦争という不幸な、我々日本語で言うと難しい言葉で、遺憾な、よろしくない、早く終わってほしいし、ウクライナが元に戻ってほしいと我々も思ってます。ただ、それをきっかけに避難者の方々が日本に来たということを、我々日本人としてもしっかり受け止めて、それを日本社会を良くしていくことにつなげると、これからの社会をどう作っていくかということに活かしていくことが必要です。

先ほどもコロナで社会福祉協議会、社会福祉協議会っていうのは全ての区市町村にあるのですが、そこに外国人の方々が来て、ああこんなに住んでるんだっていう風にびっくりしたという話をちょっとしましたけれども、それをきっかけにしてそういう社会福祉協議会の方々から私にも、じゃあ外国人の方々を支援するにはどうしたらいいんだとか、外国人の方々の課題はどういうところにあるんだとかいう問い合わせが増えてるんです、明らかに。それは避難者の方々が、さっき言った38のところに住まわれたということもありますし、コロナの話もあります。だから今、すごく転換期なんですね。

何が言いたいかというと、先ほどと同じことになっちゃうんですけれども、皆さんと一緒に、避難者の皆さんと一緒に、今の課題、困り事について考えていくことは、我々日本人であり、私は東京都ですけれども東京都なりにこれからの社会をつくっていく人間として、皆さんと一緒に考えていくことがすごく必要というふうに、今強く感じています。

ですので、これからも東京都は、日本は3月までで1年の区切りがあって4月から3月までで一つの年度の区切り年度というんですけれども、1年の区切りですが、4月以降もこのポプートニクについては続けたいと思ってますし、そういう取り組みをこれからもやっていきますので、ぜひ皆さんも協力をしていただければと思います。

横山) ありがとうございます。

櫻井さんがおっしゃった、まさに当事者と一緒に、そのところがやはり大事な点というのを今日私も改めて思いましたし、場当たり的に、ある意味勢いで始まったというところは自分も振り返ってですよ、今日自体も勢いでここに来てるといっているはあるんですけれども、やっぱり場当たり的だとか勢いだけではなくて、この時にどう本当に真の人道主義というようなことを私たちが捉え直すかっていうようなことだと、お話を聞いていて思いました。

それで私一つあるのは、ユリヤさんとイリナさんのお二人のスマートな、私と違ってスマートなプレゼンを聴いて、やっぱり働くキャリアのある女性としての居場所を作りたいという思いは言葉は通じなくてもすごく私ビンビンくるものがありました。

避難者の皆さんも何かそういうものを感じておられる、あるいは日本社会の側の課題というかそれこそ就労環境なんかも含めて、同調圧力とか、私たち自身がもう慣れっこになって気づいてないような部分ももしかして私たちが彼女たちの違和

感を通して教わることもたくさんあると思います。

とすると、これは外国人だけの問題ではなくて、これからの若い人にとっても暮らしやすい日本につながってほしいですし、先ほどの民生委員の若返りとか新しい人もそこに入ってね、何かそういうことが自発的にどんどん起こってくるような、何かそういうことの動きもつくっていききたいなというようなことも思いました。

すいません、最後にちょっと勝手のことを言いましたけれども、ここは小野さんに、今日この前に立ったものとして、これだけはここに今日立った以上「俺に任せとけ！ 私たちに任せておけ！」というメッセージを皆さんにお願いできますか。

小野） 皆さんおっしゃっているんですけど、このウクライナ避難民受け入れっていうのは、もう過去に例のないような規模になっています。なので何としても、何としてもですね、皆さんが避難民受け入れ、難民受け入れの良いモデルケースになれるように、私は受け入れた皆さんを全力でサポートしています。

それで何としてもですね、これを良いモデルケースにして、他の国の難民の受け入れに日本政府が動けるようにしていきたい、それはすごく強い思いで思っています。それには私たちだけでは駄目なんですね。皆さんのご協力も必要で、私たちも頑張ります。死ぬほど頑張ります。で、頑張っています。でも、皆さんは本当に幸せに生きていただく、日本で楽しく、幸せに生きていただ

くってというのが一番大事です。それがその成果につながりますから、仕事とかもそうですし、余暇とかも楽しんでいただきたい。

日本の文化にも触れていただきたい。逆に日本の人達に、ウクライナの文化も発表していただきたい。そういうのを私たちは今後も進めていきたいなと思っています。

だから本当にこれを良いモデルケースにして、日本政府を動かしたい。そのためには本当に皆さん一緒になって頑張りましょう。どうもありがとうございました。

別府に行きたかったら温泉がいっぱいありますので、ぜひぜひ。

横山） 第2部私たち日本社会が問われていること、ということでまだまだ話は尽きませんが、パネルディスカッションを終わりにさせていただきたいと思います。

本当にありがとうございました。皆さん、拍手をお願いします。ありがとうございました。

